

障害を併せもつ人を想定した視覚障害疑似体験

肢体不自由養護学校では、脳性まひ児の半数以上に何らかの視覚障害があると考えられていたり、脳障害のある児童・生徒についても医師の所見の中に視覚障害の存在が示されていることが多い。

しかし、言語的なやりとりや指さしができない児童・生徒に対しては、通常の視力検査を実施することが困難であることから、児童・生徒の視力がどれだけあるのか、どのような見え方をしているのかがわからないケースが多い。そのために、児童・生徒の「見る」ことのニーズに十分に対応することができていないというのが現状であろう。

そこで、障害児の視覚の評価と支援に関する専門家の指導のもとで児童・生徒の「みる」と(視機能)を評価し支援する方法を学ぶことによって、児童・生徒にとって見やすい環境を工夫していくとともに、見ることを通して授業の中で児童・生徒の主体性を引き出し、コミュニケーションを充実させていくこととした。本実践では、以下のような方法で視機能評価方法の学習・実習・実践とその結果に基づく環境整備を実施した。

- (1) ロービジョン(弱視)シミュレーションメガネを使った疑似体験を通して、子どもたちの見える世界の一端を知る。
- (2) コミュニケーション支援についての学習会を行う。
- (3) 視機能の評価と支援に関する学習会を行う。
- (4) 個々の事例の検討を通して、視機能の評価と支援に関する知識を深め、授業の中に生かす。

ロービジョン(弱視)の疑似体験

1 目的

子ども達は毎日の活動をどのように感じているのであろうか。子ども達の視線で世界を見、子ども達の行動を理解し、子ども達がより快適に、より楽しく日々の活動を行えるように心がける必要がある。そのための一つの方法論として、子ども達の世界を彼らの視点(見え方/見えにくさ)で様々な活動を行ってみることを通して想像し、日々の教育実践を振り返るきっかけとする。

2 実習方法

視覚に問題を持つ子どもたちが毎日の活動をどのように感じているのか、子どもたちの視点(見え方、見えにくさ)に立って、摂食、あそび、移動の三つの場面を体験した。シミュレーションには、高田眼鏡製のシミュレーショントリアルセットの最重度白濁と視野狭窄3度の2種類を用いた。実習は2人1組で行い、一人は体験者(ロービジョン役)で、もう一人は授業や生活の中でいつも子ども達と接しているように、話しかけたり介助をしたりする介助(教師)役とした。体験者役と介助者役の両方の役割を交替しつつ行った。なお、介助者の役割は、安全確保だけではなく、体験者がどのような行動を取るかを観察することも含まれている。体験者も介助者も疑似体験終了後に感想を記録した。一つの実習を終えたら、すぐに、見え方や感じたことをこのインストラクション・ペーパーにメモして、役割を交代した。なお、体験前に、疑似体験の意義や限界について確認を行い、以下のポイントを意識しながら体験を実施した。

(1) ポイント1 ロービジョンの見え方の多様性を知る

ロービジョンの見え方／見えにくさは、像のボヤケ、グレア光に対する感度の低下(白濁はその中の1つ)、求心性視野狭窄、中心暗点の4つに分類される(小田・中野)。子ども達の見え方／見えにくさの多様性は、この4つの見え方／見えにくさの程度と組み合わせがそれぞれ異なるからだと考えられている。今回の疑似体験では、これらロービジョンの見え方／見えにくさを高田眼鏡製のシミュレーショントリアルセットを用いて体験する。

(2) ポイント2 ロービジョンのディスアビリティは課題によって異なることを知る

視力が低かったり、視野が狭かったりすると何もかもが出来なくなってしまうわけではない。課題によっては、それほど困難を感じないものもある。これは、何を行うかによって必要となる視力や視野が異なるからである。ここでは、食事場面と移動・遊び場を体験するが、課題によって困難さが異なることを共感的に理解する。なお、以下の点に特に留意しながら体験を行う。

- a) 同じ見え方でも容易に達成できる課題とそうでないものがあることを確認する。
- b) 視力を要求する課題と視野を要求する課題があることを確認する。例えば、視力が良くても視野が狭いと探索が困難になることを確認する。
- c) 体験を分析し、どのような配慮が必要かを考える。

(3) ポイント3 見え方に応じてエイドの工夫や視環境の配慮の仕方が異なることを知る

いかなるタイプのロービジョンにも対応できる見やすい環境というものを設定するのは容易ではない。なぜなら、ロービジョンのタイプによって見えにくさの内容も原因も異なるからである。例えば、一般に部屋の照明は明るい方がよいとされているが、まぶしさを訴えるロー

ビジョンにとっては部屋の照明が明るすぎるのはよくない。このように、見え方に応じて適切な環境条件は異なることに注意しながら体験を行う。

3 実習内容

(1) 実習1 食事場面

a) 介助を受けながら食事をしましょう。

2人1組のペアになります。ロービジョン役は手を自由に動かさせません。教師役の食事介助を受けながら食事をします。

[ポイント]

- 食器の上の食物は見えますか。
- 教師役の顔や洋服はわかりますか。
- スプーンが口元に運ばれてくることがわかりますか。教師役の位置やスプーンの運ばれてくる方向によって違いがありますか。食物が何かわかりますか。
- 食物が食器にどのくらい残っているのか、食べ終わったのかわかりますか。
- どんな話しかけがあったら、楽しく食事ができるでしょう。

b) 自分で食事をしましょう。

器に入った食物を食べましょう。

[ポイント]

- 器に入った食物は何かわかりますか。
- 器と食物によって見え方に違いがありますか。
- 「自分で食べる」と「食べさせてもらう」についてどのように感じましたか。

(2) 実習2 移動と遊びの場面

2人1組のペアになります。弱視児役は以下の3つの条件で行います。

a) あおむけに横になりながら

b) ハイハイしながら

c) 散歩

a)と b)の条件では、室内でいつも子ども達としている遊び(ボール投げ、紙芝居、パソコンなど)をしましょう。c)では屋外へ一緒に散歩にでかけましょう。

[ポイント]

- 教師役の顔や洋服、動きはわかりますか。
- 教室や遊び道具の見え方はどのようですか。姿勢によって違いますか。
- 窓から差し込む光や蛍光灯はどのように見えますか。
- 屋外はどのように見えますか。また、室内との見え方に違いはありますか。
- 2種類のシミュレーションと移動の困難さに違いはありますか。

このインストラクションペーパーは中野泰志先生(慶應義塾大学)作成のものからの抜粋です。